講演抄録

メディアから見たグローバル化

ＮＨＫ解説委員
藤澤秀敏

１．異文化体験の重要性

私の異文化の初体験は、高校時代 AFS でアメリカに留学したことにある。そこで、肌感覚でアメリカ人の考え方知ることができ、そのことが、その後の特派員の仕事に大いに役立つことになる。

異文化体験の重要性は、文化相対主義を実感し、互いの文化を尊重し合いながら共存することを学ぶことであり、それはグローバル時代に生きる最低限の資格、条件であると思う。ではそのグローバル化にメディアはどう対応してきたのか。40 年間働いたテレビの世界を中心に話したい。

２．概念上（意識の上で）のグローバル化

テレビにとってのグローバル化とは何だろうか。それは国境を越える放送であり報道である。国境を越えるテレビ放送がはじまり、報道が進展しその結果、どうなったであろうか。では国境を越えるとはどういうことを意味するのであろうか。

国家と国家を分け隔てる物理的な境界、それが国境である。さらに概念としての国境もある。つまり、「国境を越える」とは、物理的なことのみならず、概念上の意味もあり、その両方の越え方がある。

「グローバル化」とは、狭義の意味では冷戦の崩壊でイデオロギー面での東西の垣根がなくなり、さらにインターネットなどの通信手段の発達で世界が一体化したことを指している。しかし概念上はそれ以前から起きているとも言えよう。

実際に私が概念上のグローバル化を実感したのは、1972 年にアポロから撮影された写真を見た時のことである。大きな衝撃を受けたことを覚えている。つまり、我々、地球に住むすべての人は、同じ星に住む仲間ではないか、ということを教えてくれたのである。

その写真であるが、ひとつは 1972 年 12 月 7 日、アポロ 17 号から撮影された地球である。これは「ザ・ブルー・マーブル」(the blue marble:「青いビー玉」)、と名付けられた有名な写真である。その時の宇宙飛行士ユージン・サーナンは「我々は月を探査しに行ったのだが、実際には地球を発見することになった」と話している。含蓄のある言葉である。もうひとつは、それに先立つ 1968 年 12 月 24 日、アポロ 8 号から取られた写真である。最初の写真と違ってこの写真には、月と地球が写っている。つまり立ち位置、写した人間と月、地球の位置関係がはっきりしているのである。

この頃から私たち地球に住む人間は、概念上の(意識の上での)グローバル化、つまり地球村の住人であることを実感し始めたのではないだろうか。

３．グローバル化の推進力：衛星中継

さて、グローバル化の推進力となったのは、交通手段の発達であり、通信手段の発展である。帆船から蒸気船、飛行機の出現という交通手段の発達、さらには通信技術の発達抜きにはグローバル化の進展はなかったであろう。歴史を遡れば、1894 年にグリエルモ・マルコーニが無線通信実験に成功し、その後、ラジオやテレビが発明され、大陸間の長距離の通信も人工衛星の出現で可能になる。メディア、特に放送メディアにとってのグローバル化は、この衛星伝送中継の発達が大きな促進剤となった。

1960 年代の初めに、米国と欧州の間の衛星中継が成功し、1963 年 11 月 23 日には日本と米国の間で初の衛星中継実験が行われた。このときは一回目はケネディ大統領の挨拶の中継を予定していたが、直前に大統領が暗殺され、代りに 20 分間、砂漠の映像が流れた。二回目の中継ではケネディ大統領死亡のニュースが流れた。

当初はコスト面で非常にお金がかかったため、限定的な利用に絞られていた。ちなみに一回最低 100 万円という高額であった。1982 年に私が香港に赴任した時であるが、アメリカにアキノ元上院議員が飛行機のタラップから降りてきてすぐに暗殺された。この事件直後のマニラの様子を中継した NHK 特集を担当したが、これは国境を越えて歴史的な動きを伝えた NHK の衛星中継の初期の段階での例である。

その後、衛星中継は日常茶飯事となり、NHK は衛星、海底ケーブル経由で 24 時間、世界各地と結んで生の中継ができる体制を整えた。

その後、「国境を越える」報道は、冷戦の終了、天安門事件、湾岸戦争、イラク戦争と世界が動く中で着々と進んでいった。

４．国境を越える報道

まずは冷戦の終了である。東欧の革命については、衛星テレビを東側の人たちがパラボラアンテナで傍受して、革命前から西側の豊かで自由な生活を知っていたこと、さらに革命進行中も各国で起きている変革の情報を共有していたことが、大きな促進力になったと言われている。これが、テレビが東欧に革命を起こし、冷戦終了を導いたと言われる所以である。

次に天安門事件であるが、CNN はフライアウェーと呼ばれる小型の衛星伝送施設、中継施設を持ち込んで、天安門事件に至る北京の緊張を生で伝え続けた。中国という国家の言論統制の厳しい国からでさえ、直接、放送を出せるというグローバル化時代を象徴する放送であった。

さらに 1991 年の湾岸戦争である。これは戦争も国境を越えて中継される時代の幕開けとなった。そしてそれが頂点に達したのが、2003 年のイラク戦争である。このとき、アメリカのテレビ局はアメリカ軍の進攻を生中継したのである。歴史が動く現場からの生中継で、世界中で人々が同時に事態の進捗を目撃し、同じ経験を共有するという画期的なこととなった。

それではメディアは完全に国境を越えたのだろうか？

５．国家とインターネット

国家はそれを阻止したい時には、強制力も含めてあらゆる手段を使って阻止することができる。たとえば天安門事件であるが、CNN は鎮圧事件が起きる前に公安警察によって伝送施設の使用をやめさせられた。このように、国家がメディアに対して「国境」を閉鎖することは日常茶飯事である。たとえば 2009 年 6 月のイラン大統領選挙であるが、選挙後、外国の報道機関は NHK も含めて一切、外での取材活動を禁止された。ただこの時、新しい形の国境を越えるコミュニケーションの手段としてインターネットが注目されたのである。

デモの参加者など一般の人が携帯で撮影した写真や映像が携帯メールを通じて世界に発信した。たとえば「ネダー」さんという女子学生が何者かに頭を撃たれ、亡くなる様子が撮影された映像が YouTube などの動画サイトにアップされ、世界のテレビ局で放送された。とは言うものの、インターネットも国家によって監視され、都合が悪い時には封鎖されることもあるので、国家の壁や国境の壁はいつまでも残るのである。

６．ナショナリズムの壁

また国境封鎖も現実に起こる。2006 年 8 月、キューバのカストロ議長（当時）が腹部の大出血で倒れた際、外国の報道陣は入国が禁止された。

さらにもう一つの壁、これは国家による物理的な壁よりも、考えようによっては、もっと手ごわいかもしれないが、それは国民自身の心の中に持つ排外意識である。つまり、ナショナリズムという壁である。人間だれしも、外国との関係が深くなるにつれて、「自分に戻る意識」が芽生える。また対立関係になると、ナショナリズムが起きがちである。

2003 年のイラク戦争では、アメリカの一部の国民がこのナショナリズムの罠にはまってしまった。

メディアも時として、このナショナリズムの罠に陥ることがある。イラク戦争ではアメリカのテレビのキャスターの中にはアメリカ国旗のバッジをつけて放送した人もいた。日本の場合も報道機関が日中問題などでナショナリスティックな報道に傾く場合もある。歴史や領土をめぐって、日中や日韓の間でこのナショナリズムがわきあがり、ブログなどで激しい非難合戦が繰り広げられている。

そのナショナリズムの罠に陥ることをお互いに少しでもなくす手段が、国際テレビ放送である。CNN、BBC、アルジャジーラがその例である。NHK も 2009 年 2 月からテレビ国際ニュース放送を開始した。ただ、時に国旗を背負っての報道になる国や放送機関もないわけではい。いかに客観的な報道という原則を固守するかがが、重要だ。

７．メディアの「グローカル化」

「テレビが国境を越える」時代において、テレビが果たす役割の一つは、世界の動きと国や地域を結び付けることである。つまり、メディアのグローカル化が重要なのである。

「グローカル化」とは、グローバル化を受けてローカルが主体的に対応していくことであり、グローバルとローカルの相互作用を意味する。

グローバル化時代のメディアは、この「グローカルな視点」での報道をますます迫られる。私自身も実際に「ニュースウオッチ９」を司会していた時、それを心がけていた。たとえば 2008 年 3 月 13 日放送した番組では、リーマンショック前のサブプライムローン問題がいかに、円高や日本の不動産市場へ影響を与えたかなどについて伝えた。

グローバル化の時代のメディアは、このようにグローカルな視点が常に必要である。グローバル化の中でどう対応するか、その指針を与えるような報道でなくては関心を寄せてもらえないし、視聴者のニーズに応えたことにならないからである。これは NHK のようなナショナル・メディアだけでなく、地方の放送局、新聞、ミニコミ誌も含めてグローバル化時代のメディアの重要な役割であると思う。

そのためには、 まず世界のことに常に関心を持つ広い視野が必要であろう。そして
もうひとつは、先に述べたように、ナショナリズムの罠に陥らない自覚を持ち、自らを自制し、自律することが必須である。

つまるところ我々は、「宇宙に浮かぶ地球」という国境線など引かれていないひとつの星に住んでいるのだ。アポロの視点に戻ることが重要であり、運命共同体であることを忘れるべきでない。このことは、異文化経営にも通じることではないだろうか?